詳註 對譯

日語歷史讀本

東方印書館發行

1037
日本語教育振興會

詳註譯對

日語歷史讀本

東方印書館發行

東京外国語大学
図書館蔵書
673750
平成 23 年度

對譯詳註

日語歷史讀本

例言

一、本書係爲學習日語而願熟習歷史上之用語者而編纂。

一、本書之材料悉自日本國定尋常小學校國語讀本中只就其有關於歷史之部分摘錄者並非記述日本國史之全班。

一、本書之假名用法其變化之語尾依照正式之歷史的用法此外則均依據表音的假名用法。

著者識

昭和十一年二月

對譯詳註 日語歷史讀本

目次

一 金鵄勳章……一
二 熊襲征伐……四
三 八幡太郎……七
四 くりから谷……一〇
五 弓流し……一三
六 萬じゆの姫……一六
七 千早城……二六
八 鎌倉攻……三一
九 川中島の戰……三五
十 木下藤吉郎……四〇
十一 加藤清正……四二
十二 吳鳳……五一
十三 乃木大將の幼年時代……五五
十四 弟橘姫……五九
十五 兩將軍の握手……六二
十六 水師營の會見……六四

日語歷史讀本 目次 終

對譯詳註 日語歷史讀本

一

一 金鵄勳章

「おぢさん、勳章がふえましたね。一番こつちは金鵄勳章でせう。」

「あゝ、今度の戰爭でいただいた。」

「金の鳥がついていますね。」

「これは鵄だよ。それで金鵄勳章といふのだが、鵄のついてゐるわけは知つてゐるだらう。」

遺贈文章是記載一個孩子和他的叔叔的問答，就是叔叔是一個軍人，在他穿的軍服上胸間帶着多數勳章，一一列排着。這孩子指着那些一列所排的勳章一頭而問道：

【いただいた】 臣下自皇上領賜的。

一 金鵄勳章

「叔叔，勳章增加了啊，在這邊先頭上的是金鵄勳章罷。」

「是啊，在這一回戰爭領賜的啊。」

「帶着一隻金鳥呢。」

「這個是金鵄鳥啊。因爲牠是金鵄，所以叫做金鵄勳章，可是你知道帶着鵄鳥的原因罷。」

【わけ】 緣故。原因。

「いゝえ」

「話しで上げようか。」

「はい。」

「むかし神武天皇がわるものどもをこせいばつになった時、わるものどもが強くて、おこまりになったことがある。其の時一天にわかにかき曇って雹がひどくふり出すと、金色の鶏が一羽飛んで來て、天皇のお弓の先にとまった鶏の光がまるでいなびかりのやうで、わるものどもは目を明けてゐることが出來ず、恐れてみんな逃げてしまったさうだ。其のいわれで、戰爭の時、大き

【わるものども】 惡人的黨類。
【こせいばつ】 此ご字是敬語。例「ご馳走」美餐。
【強くて】 此て字表示理由。
【おこまりになった】 こまつた的敬語。例「話した」的敬語「お話しになつた。」
【……ことがある】 此こと是時之意。
【かき鶏つて】 此かき沒意思，就是强語勢而用的。
【まるで……のやうで】 好像……似的。例「硬くてまるで石のやうだ」硬的好像石頭似的。
【……ようだ】 聽說……。例「李さんはもう歸つたさうだ」聽說李君已經回來了。
【其のいわれで】 由那個故事。

「不知道。」

「我教給你罷。」

「好。」

「聽說古時候在神武天皇征伐惡人的黨類的時候，惡人的黨類很强的，有時候很感到困難。在那個時候猛然間滿天都陰起來啦，雹子下的很利害的時候，一隻金色的鶏鳥兒飛來，落在天皇的弓梢上。鶏鳥的光簡直像電光一樣，惡人的黨類眼睛都睜不開了，恐懼着全都逃跑啦。因爲這個故事所以對于在戰時樹有高

功的軍人下賜的勳章帶上了一隻金鷄鳥兒。

な手がらを立てた軍人に下さる勳章に金の鶏をおつけになったのだ。

【下さる】 爲下的。
【おつけになった】 つけた的敬語，已用。

此の勳章には功一級から功七級まである」

「をぢさんのは。」

這個勳章是從功一級到七級。」

「叔々的呢？」

「叔々的是功七級。」

「をぢさんのは功七級だ。」

二　熊襲征伐

昔熊襲のかしらに川上のたけるといふ者があつて、天皇のおおせに從ひませんでした。天皇は日本武尊にこれを征伐せよとおおせられました。

尊は其のころ、やまとおぐなといふ御名で、御年はわづかに十六でいらっしやいましたが、いさみ立つてお出かけになりました。

お着きになりますと間もなく、たけるが新しい家を造つて、人々をあつめて、其の祝を

【天皇のおおせ】敕命。

【おおせられました】敕命下來了。

【いらつしやいました】あつた或居了的敬語。

【いさみ立つて】勇躍而……此立つ沒有意思，就是强調語勢而已。

二　征伐熊襲

古時候熊襲的領袖有個叫做川上武的，不聽天皇的命令，天皇派遣日本武尊去征伐他去。

尊在那個時候，名子叫做日本童男，年紀僅々十六歲，但是奮勇地去了。

他剛到了有不幾天，川上武就建築新房子，正聚集許多人來

しました。尊はかみをといて、女のすがたになり、つるぎをふところにかくして、其の家の中へおはいりになりました。

大ぜいの女どもにまじつていらつしやいますと、たけるは尊を見つけて、自分のそばへ呼びました。

夜がふけて、人々はかへりました。たけるも酒によつてねむりました。此の時尊はふと

【いらつしやいますと】此字是「……的時候」的意思。

祝賀這個呢。尊把頭髮散開了，扮做女裝，把寶劍藏在腰邊，便進了他的房子裏。

混在許多的女人們裏，川上武看見了尊，就招呼到自己的旁邊來啦。

夜深啦，人們都回去了。川上武也喝醉睡了。這個時候尊把腰邊的寶劍抽出來，刺進川上武的

【なみ〳〵の者なら】若在平稱鑿平常的人說。

【……だけあって】此だけは相當的意思。例「先生は先生だけのことはある」—教習具有教習的能耐。

ころのつるぎを出して、たけるのむねをおつきになりました。なみ〳〵の者なら、「あっ」とさけんで死にませうが、たけるも熊襲のかしらだけあって、

「しばらくお待ち下さい。申したいことがあります。」

【どなたでいらっしゃいますか】どなたですか的更恭敬語。是經費姓的意思。

【たゞ人】尋常的人。

【おありなさらなかった】なかった的敬語。

といひました。尊は手をおゆるめになりました。

「あなたはどなたでいらっしゃいます。」

「われは天皇の皇子やまとおぐな。」

「あゝ、たゞ人ではおありなさらなかった。自分にまさる者はないので、たけると申胸膛。要是汎々的人，「啊」地叫一聲就死了罷。但是因爲川上武也是具有熊襲領袖的能耐，他說道：

「請您暫停一停，我有話說。」

尊把手放鬆了些。

「您是那一位啊？」

「我是天皇的皇子日本童男。」

「啊啊！不是普通的人啊。因爲世上沒有勝過我的人，所以才

【まし上げます】上げます的更恭敬話。

【申したまへ】此たまへは是なさい的更恭敬話。現今俗話上不多用，就在學生界用之。例「君、此處へ來たまへ」—你過兒來罷。」

【申し上げる】申す的更恭敬話。

して居りましたが、みやこには強いお方がおありになった。今御名をまし上げます。日本武皇子と申したまへ。」

といって息かたえました。これから後やまとをぐなの皇子を日本武尊と申し上げることになりました。

三　八幡太郎

義家姓是源（讀做みなもと），通稱八幡太郎。文武兼備之名將而最善弓術，又頗富雅趣，甚被國民所愛敬，後世源氏致祭崇者義家之恩惠居多。本篇是其一逸話。

【かりまた】鵰羽箭。可看插圖。

【追つけました】追ひかけました的轉說。追ひかけ

八幡太郎義家が或日安倍宗任をつれて廣い野原を通りますと、狐が一匹とんで出ました。義家はせ中のうつぼから、かりまたをぬいて狐を追っかけました。射ころす

自號做武呢，在京師居然有強有力的了。

現在奉給您一個令名罷，叫做日本武皇子。」

說着斷了氣。從此以後對日本童男都稱做日本武尊。

三　八幡太郎

某一天八幡太郎義家領着安倍宗任走過曠野，一隻狐狸跳了出來。義家從背裏的箭壺中拔出燕羽箭來，跑着追趕狐狸。要射殺又覺得怪可憐的，照準了兩耳之

のもかわいさうだと思って、兩耳の間をねらって、頭の上をすれ〳〵にいました。矢は狐の鼻のさきの地面につっ立って、狐はころりとたおれました。

【すれ〳〵に】 剛擦着。例「二人の者がすれ〳〵に通り過ぎた」兩個人剛擦着肩過去了。

間，剛擦着頭頂射了去。箭是立在狐的鼻子前的地面上，狐打了一個滾倒下了。

かけよって見て、宗任が

跑到跟前一看，宗任說：

「矢はあたって居りませぬ。」

【居りませぬ】 和居りません。

「箭並沒有中上，狐可死了。」

「矢はあたって居りませぬのに、狐は死んで居ります。」

【……のに】 ……可是。……還是。

義家說道：

「是嚇倒了，就這麼放着，這就會蘇醒過來的。」

と言ふと、義家が

「びっくりしてたおれたのだ。ほって置け、今に生きかへる。」

と言ひました。

さて宗任がかりまたをぬき取って、義家にか

【さて】 却說。

却說宗任把燕羽箭拔了來，還

へしますと、義家はせ中をくるりとむけて、うつぼへさゝせました。かりまたは、矢じりがつばめの尾のやうにわれたたいそうするどい矢で、宗任はついこの間義家にこうさんしたてきの大將なのです。

【さゝせました】 叫他揷。

給義家，義家便把背轉過來，叫他揷在箭壺裏。燕羽箭的箭頭像燕子尾巴似的分開，是非常銳利的箭，宗任是最近投降于義家的敵方的大將，所以義家的家臣們都嚇的直哆嗦說道：

【つゝ此の間】 最近。

「あぶないことだ、もし宗任に惡い心があったら」

「很危險呵，假使宗任要有惡心呢」。

【ひや〳〵】冷汗滿背之狀。

と、義家の家來どもはひや〳〵したといひます。

義仲姓源氏爲前篇所載八幡太郎義家之後裔。源平二家俱爲皇帝之藩屏，各有盛衰。本篇係平家全盛之末期，平家久保平隆盛，源家衰微，兩雄相鬩，四方騷然。文治四年，源頼朝討平家。自此源氏遂無敵國。後平家滅亡，頼朝放逐義仲自木曾山中（在當時帝都之西向京都東方長野縣）進軍西向京都，與平家決戰，義仲敗之，後其一族亡。

四　くりから谷

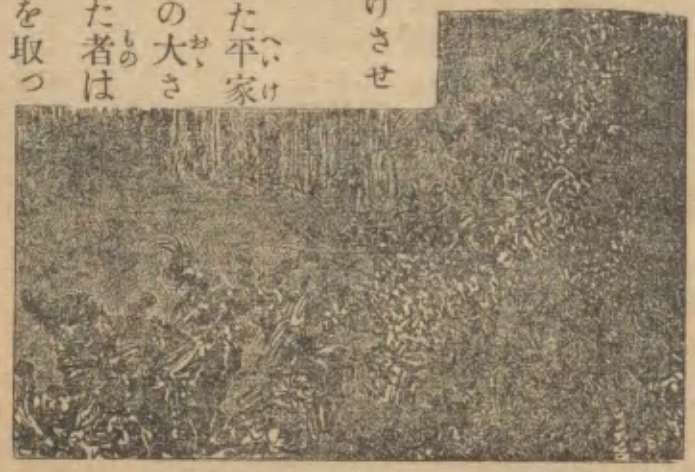
木曾義仲が都へせめ上ると聞いて、平家はあわてて討手をさしむけました。大將は平維盛で、十萬騎を引きつれて、越中の國礪波山にじんを取りました。義仲は五萬騎を引きつれて、これもおなじく礪波山のふもとに陣を取りました。

兩方からおしよせてちんの間がわづか三町ばかりになりました。

聽說木曾義仲逼進了都城，平家就周章狼狽若派人去討伐去了。大將是平維盛，率領十萬騎兵在越中國的礪波山佈上了陣勢。義仲率領五萬騎兵，他們也在同一的礪波山山脚排上陣了。

兩方面都往前湊來，兩陣的中間僅々有三町。

其の夜のことです、義仲はひそかに味方の者を敵の後へまわらせて、兩方から一度にどっとときのこえをあげさせました。



【平家方】平家方面的。

【上を下へ（の）】周章的往上往下亂闖。間得馬仰人翻。

不意を討たれた平家方は、上を下への大さわぎ、弓を取った者は矢を取らず、矢を取った者は弓を取らず、人の馬には自分が乘り、

是這天晚上的事情，義仲密令自己的部下繞往敵人的背後，從兩方面一齊做出吶喊的聲音。

被攻于不意的平家，從上到下都特別地騷亂起來，拿了弓的人沒有拿箭，拿了箭的人沒有拿弓，自己騎了他人的馬，他人騎了自己的馬，也有倒騎的，也有兩個人騎一匹的。暗度非常的黑暗，道也沒有，平家那方面連逃

自分の馬には人が乘り、後向に乘る者もあれば、一匹の馬に二人乘る者もあります。暗さは暗し、道はなし、平家方はにげ場がなくて、後のくりから谷へ、なだれをうつて落ちました。

親が落ちれば其の子も落ち、弟が落ちれば兄も落ち、馬の上には人、人の上には馬、かさなりかさなってずいぶん深いくりから谷が、平家の人馬で埋まりました。

大將維盛は命からゞ〳〵加賀の國へにげました。

【暗さは暗し】黑暗的很黑。

【なだれを打つて】像冰雪崩落的一般。紛紛面落下去。

【命からゞ〳〵】九死一生。

【加賀國】北陸道石川縣。

跑的地方都沒有喪，往後面的谷蜂擁着落下去。

父親墜下去，他的兒子也墜下去，弟弟墜下去，哥哥也墜下去，馬的上邊是人，人的上邊是馬，墜下去了很深的谷裡由平家的人馬塡上了。

大將維盛好容易沒死的逃向了加賀國。

五　弓流し

屋島の合戰に義經が小わきにはさんでいた弓を海へ落しました。

弓は潮に引かれて流れて行きます。義經は馬の上にうつぶしになって、むちのさきでそれをかきよせようとします。敵は船の中から熊手を出して、義經のかぶとに引っかけようとします。源氏の者ども は義經をかばひながら、

「捨てておしまひなさい。」

「お捨てなさい。」

【義經之兄】頼朝揚兵於關東，西討平家。頼朝義經爲前驅所載義仲之甥。義經承頼朝之命大破平家，追而至屋島。屋島在本島之四嶺下關附近。屋島之一戰遂亡平家，頼朝即開幕府於關東之鎌倉，遂日本封建之基。

【小わき】腋下。此小字是捨頭語，沒有意思。

【かばひながら】一面保護着。

「誰捨了罷！」

「捨了罷！」

【口々に】 人人都說。

と口々に言ひます。それでも義經は、太刀で熊手をふせぎ〳〵、とうとう弓を拾ひ上げました。陸へ上つた時、家來が

【ふせぎ〳〵】 和ふせぎながら一樣。

「たとひ金銀で作つた弓でも、御命には代へられませぬ。」

【たとひでも】 假令一遍是……。

就是這麼樣，義經用大刀抵擋鈎鏈鎗，到底把弓鈎起來了。上陸的時候，弁從們說道：

「就假使是用金銀做的弓也不能代替您的命啊。」

と申しますと、義經は笑つて、

「いや〳〵、弓が惜しかつたのではない。叔父爲朝の弓のやうな强い弓なら、わざと敵にやつてもよいが、此の弱い弓を取られて、『これが義經の弓だ。』などと言は

【わざと】 故意的。

義經笑着說道：

「不是的，並不是可惜弓啊。因爲若是像叔父爲朝的弓那麼樣勁的弓，就是特意給敵人也可以啊，但是這張弱弓被他們得了去，說：『這是義經的弓啊！』等々的話，還有折損源氏的名譽啊！」

【名折れになる】折損名譽。受恥辱。

れては、源氏の名折れになるからだ。」と言ったと申します。義經に此の名を惜しむ心があったので、何時の戰にも勝ったのでございませう。

源頼朝已亡平家，任全國總追捕使，建幕府於鎌倉。本篇即爲在任中之一挿話。

【鶴岡八幡宮】在鎌倉，今尚存。八幡宮祭弓矢之神。

【……とことになって】定規一而……。

六　萬じゅの姬

源頼朝が鶴岡の八幡宮へ舞を奉納する事になって舞姬をあつめました。十二人いるうち、十一人まではありましたが、あとの一人がありません。こまっている所へ、御殿に仕へている萬じゅがよからうと申し出た者がありました。頼朝は一目見た上でと、萬

因爲義經有這個愛惜名譽的心，所以在什麼時候的戰爭上都獲勝利的。

六　萬壽姬

源頼朝決定上鶴岡的八幡宮進献舞跳，集合了舞姬，需要的十二名中已經有十一名了，最後的一名沒有啦，正在爲難的當兒，有的人稟道，在府裏做工的萬壽可以做。頼朝說看一看再定規，

【一目見た上でと】一目見た上で(定めうよ)と。

じゅを呼出しましたが、かおも美しく、すがたも上品に見えましたので、さっそく舞姬にきめました萬じゅは當年ようやく十三、舞姬の中では一番年わかでございました。奉納の當日は、頼朝をはじめ、舞見物の人々が何千人ともなくあつまりました。一番二番三番と、十二番の舞がめでたくすみましたが、其の中でことに人のほめ立てたのは五番目の舞でございました。此の時には頼朝もおもしろくなって、いっしょに舞を舞ひました。其の五番目の舞姬といふのは、かの萬じゅの姬であったのでございます。

【何千人ともなく】不知道多少千人。

【めでたくすみました】舞蹈在諸事很順調之中完了是很可贊的。

【ほめ立て】此「立て」沒有意思。

把萬壽召呼出來，臉子很美，身姿看着也似上流一般，立刻就定妥了他做舞姬。萬壽在這年纔十三歲，是舞姬中年紀最輕的。

進献的當日，以頼朝爲首，看跳舞的人不知道聚來有多少千人。自第一回、第二回、第三回到第十二回的舞挨次的在諸事順調之中完了，就中最得到人的讚美的是第五回的舞。在這個時候頼朝也很覺得有趣，一塊兒舞起來了。第五回的舞姬就是萬壽姬啊。

翌日賴朝は萬じゅを呼出して、

【さて〳〵】 奬賞他人之時所說的冒頭語，是古語。

「さて〳〵、此のたびの舞は日本一の出來國はどこ、又親の名は何と申す。ほうびはのぞみにまかせて取らせるであらう。」

【のぞみにまかせて】 任憑望多少給多少。

【取らせるぞ】 叫你取。ぞ字表示副告之意。

と言ひました。萬じゅはおそる〳〵、

「べつにのぞみはございませんが、唐糸の

第二天賴朝把萬壽叫來，說道：

「啊！這一回的舞是日本頂好的了。家鄉在那裏？還有，父母的姓名叫什麼？希望什麼獎品都能給你的。」

萬壽戰々兢々地察道：

「沒有別的希望，但是我很

身代りに立ちたうございます。」と申しました。之を聞くと、賴朝のかおの色はさっとかわりました。かわるも道理、これには深いわけがあったのでございます。

【身代りに立つ】 做替身。

賴朝が木曾義仲をせめようとした頃、木曾の家來手塚太郎光盛の娘が賴朝に仕へて居りましたが、之をさとって、すぐに義仲の所へ知らせました。義仲からは折りかへし返事があって、「すきをねらって、賴朝の命を取れ。」と、木曾の家につたはっていた大切な刀を送ってよこしました。光盛の娘は其の後、夜晝賴朝をねらひまし

賴朝が木曾義仲をせめようとした頃，平於骨肉相食。

【折りかへし】 信到就回信來。例「折りかへし御返事下さい」信到就給我回信罷。

【すきをねらって】 乘虛。

想要做唐糸的替身啊。」

一聽着這個，賴朝的顏色驟然間就變了。變顏色也是當然的啊，因爲這裏邊有個深切的原由。

賴朝要進攻木曾義仲的時候，木曾的侍從手塚太郎光盛的女兒正侍奉賴朝呢，知到了這個，立刻就通知義仲了。義仲那方面接到信就這麼樣回答：「尋機會取賴朝的命罷！」送來一把木曾的家傳的寶刀。

光盛的女兒此後便晝夜的窺覷

【ぼだみはなさず持つてゐた】帶着不離皮膚的。

【見おぼえがあつた】認識。曾見過似的。例「あの人は見覺えのある人だ」他是見過似的。

【ゆたん出來ぬ】疎不得神。

たが、少しもすきがありません。かへつて、はだみはなさず持つていた刀を見つけられてしまひました。賴朝は其の刀に見おぼえがあつたのでございます。さあ、此の女にはゆだんが出來ぬといふ事になつて、石のろうを造つて、それに入れました。唐糸といふのは此の女のことでございます。

【風のたより】風傳。

【鎌倉を指して】指着鎌倉。

【上りました】向都城去的叫做上り。

唐糸は其の時十二になる娘がありました。これが萬じゅの姬で、木曾に住んで居りましたが、風のたよりに此の事を聞いて、うばをつれて、鎌倉をさして上りました。二人は野をすぎ、山をこえ、なれない道を一月あ

賴朝，但是一點機會也沒有，携帶着不離身邊的刀子反倒被發見了。因爲賴朝認識這把刀，哈！對于這個女人不能不注意啊，便造了一個石牢，把她監在這裏邊，所說的唐糸就是這個女人。

唐糸在這個時候有一個十二歲的女兒。這就是萬壽姬，在木曾住着呢，從風傳聽着了這件事，便携着乳母向鎌倉而來。倆個人越野爬山，接連着走了一個多月

【御ぼうこう】侍候人。

【かげひなたなくはたらく】かげ是陰地，ひなた是向陽地。行爲沒表裏。一個勤兒做活。

まりも歩きつゞけて、よう〳〵鎌倉に着きました。

先づ鶴岡の八幡宮へまいつて、母の命を助けたまへといのり、それから賴朝の御殿へ行つて、うばと二人で御ぼうこうをねがつたのでございます。かげひなたなくはたらく上に、人の仕事まで引きうけるやうにしましたので、「萬じゅ〳〵。」と、人々にかわいがられました。

さて萬じゅは、だれか母の事をいひ出す者はないかと氣をつけていますが、十日たつても二十日たつても、母の名をいふ者がありま

沒有走慣的道兒，好容易才到鎌倉了。

先參拜了鶴岡的八幡宮，祈禱保佑母命，隨着便往賴朝的府前，和乳母兩個人請求在府裏做工。一個勤兒做工，而且還把別人的事情接過來做，所以大家都叫他「萬壽！萬壽！」很憐愛着。

却說萬壽很注意有沒有說她母親的事情的人，但是過了十天，過了二十天，也沒有說她母親的名的人。啊！母親已經不是這世

せんあゝ、母はもう此の世の人ではないのかと、力をおとして居りました。

【力をおとして】落膽両…。

或日のこと萬じゅが御殿のうらへ出て、何の氣もなくあたりをながめて居りますと、下仕の女が來て、「あの門の中へ、はいってはなりませぬ。」と申しました。わけをたずねますと、

【何の氣もなく】不料。

【下仕の女】使女分上下二種。賤かみ仕和しも仕。

「あの中には石のろうがあって、唐糸樣がおしこめられて居られます。」

と答へました。之を聞いた萬じゅの喜はどんなであったでございませう。

三月二十日、今日はお花見といふので、御殿

【お花見といふので】和「お花見だといふので」一樣。因爲人々都知道觀花。

上的人了麼？她非常的懷疑。

是某一天的事情，萬壽走到了府的後邊，正在不知不覺左顧右眄的當兒，下使女走來了，說道：「不許進那個門裏去啊！」，一打聽原因，回答道：

「那裏邊有個石牢，唐糸女士被監禁在裏頭」。聽着了這個，萬壽的歡喜該怎麼樣呢。

三月二十日，今天是觀櫻會，

は人少でございます。萬じゅは其の夜ひそかにうばをつれて、石のろうをたづねました。八幡樣の御引合はせか、門の戸は細めにして、あちらこちらさがしますと、松の一むせて置いて、姫は中にはいりました。うばを門のわきに立たにすかして、透月光照。

【おひきあはせ】引導。

【細めに】和細く一樣。

【月の光にすかして】透月光照。

所以府裏的人很少。萬壽在這夜裏密々地携着乳母尋找石牢去了。好像是八幡神引導似地，門開了一點細縫，使乳母站在門旁，姫先進裏頭去。透月光看，這兒那兒一找，在一羣松樹的裏

邊有個石牢。萬壽跑近跟前，拿手一拍後邊的門，裏邊就說道：「誰啊？」，萬壽從門縫把手伸進去，

ら立つている中に、石のろうがありました。萬じゅがかけよつて、ろうのとびらに手をかけますと、「たれか」と、ろうの中から申しました。萬じゅはとびらのすきから手を入れて。

「おなつかしや、母様。木曾の萬じゅでございます。」

「何、萬じゅ　木曾の萬じゅか。」

と親子は手を取合つて泣きました　やがてうばをも呼入れて、三人は其の夜をなみだの中に明かしました。

これから後萬じゅはうばと心を合はせて、折々ろう屋をたずねては、母をなぐさめて

【たづねては】此は字義示習慣。例「彼れは酒を飲むとは喧嘩する」他每喝酒就愛打架起來。

「可憐的很哪！我的母親啊！我是木曾的萬壽啊？。」

「什麼？萬壽！木曾的萬壽麼？」

說着，母女握着手哭起來了。不一會把乳母也叫進來，三個人哭着度過了這夜。

從此以後，萬壽和乳母合心，常々地到牢屋來，安慰她的母

居りました。そうして其の明くる年の春、舞姫に出ることになつたのでございます。

親を思ふ孝子の心には、賴朝もかんしんして、石のろうから唐糸を出して、萬じゅに渡しました。二人がたがひに取りついて、うれし泣きに泣いた時には、賴朝をはじめ、居合はせた者に、だれ一人もらひ泣きをしない者はありませんでした。

賴朝は唐糸をゆるした上に、萬じゅにはたくさんなほうびをあたへましたので、親子は、うばもろともに、喜び勇んで木曾へ歸りました。

【もらひ泣き】陪哭。

。這第二年的春天，便出來做舞姬了。

思親的孝子的心，賴朝也感服了，從石牢裏把唐糸放出來，交給萬壽。兩個人互相擁抱，歡喜着哭的時候，以賴朝爲首，在旁邊的人沒有一個陪哭的。

賴朝赦了唐糸，而且給萬壽許多賞品，母女同乳母一塊兒歡喜雀躍回木曾去了。

七

鎌倉幕府失政，後醍醐天皇起兵討伐，命楠正成於民間，以寡敵衆，遂擊滅鎌倉。千早城之一戰，正成爲忠臣之鑑，爲日本國民所最敬仰。

七　千早城

楠正成が守った千早城はけわしい金剛山上にはあるが、まわりが一里にも足らず、總勢わずか千人ばかり。之をかこんだ賊は百萬騎といふ大軍で、城の四方二三里の間は、人や馬でふさがった。

こんな山城一つ、何程の事があるものかと、賊が城の門まで攻上ると、城のやぐらから大きな石を投落して、賊のさわぐ所をさんざんに射た賊は坂からころげ落ちて、たちまち五六千人も死んだ。

【何程の事があるものか】算什麼事呢？

【さんざんに射た】亂射。

楠正成所把守的千早城雖然是在險峻的金剛山上，可是周圍還不够一里，總勢只有一千人。圍攻的賊是一百萬騎的大軍，城的四方的二三里間都被人馬塡塞上了。

這麼樣的山城一座算什麼事呢，賊一攻到城門，就從敵樓上投下大石頭，亂射賊吶喊的地方。賊從坡上滾下去，不一會的工夫五六千人都死了。

【これにこりて】由此所吃。

これにこりて、賊は城の水をたやして苦しめようとはかった。先づ谷川のほとりに三千人の番兵を置いて、城兵が汲みに來られないやうにした。

城中には十分水の用意がしてあった。二日たっても三日たっても汲みに來ない。番兵がゆだんをしていると、城兵が切りこんで來て、旗をうばって引上げた。

吃了這個虧，賊就計畫斷絕城中的水來困他們，先在澗水的旁邊屯駐下三千守兵，不令城兵來取汲。城裏邊水的準備非常充足。過了兩天，過了三天也沒有汲來。守兵一懈怠，城兵便來殺砍，奪了旗幟回去。

【惡口させた】叫他們罵了。

【くやしがる】怨恨。

正成は此の旗を城門に立てて、さん〳〵に賊を惡口させた賊が之を聞いて、くやしがって攻めよせると、正成は高いがけの上から大木を落させた。そうして、これをよけようとして賊のさわぐ所を射させて、又々五千人餘もころした。此の上はひょうろう攻にしようと思って賊は城へ攻めよせないことにした。

【この上は】事已到此往復說……

正成把這桿旗揷在城門的上邊，亂罵賊人。賊人聽着了這個便恨極的攻上來，正成從高崖上把大木頭放下去，隨着命令射向躲那棵木頭的賊的喧嚷的地方，又殺了五千多人。而後賊人想斷絕軍糧，不攻城池了。

或朝夜明頃、城中からうって出て、どっとときの聲をあげた賊は「それ、敵が出た。一騎も餘すな」とおしよせた城兵はさっと引上げたが、二三十人はふみとゞまった賊が四方から之を目がけておしよせると、城から大石を四五十、一度に落したので、又何百人かころされた。ふみとゞまっていたのは、みんな藁人形であった賊はうまくはかられたのである。

【ふみとゞまった】停住而……。落在後頭。

【之を目がけて】向這兒。

もう此の上は、しやにむに攻落さうといふので、賊は大きなはしごを作って、之を城の

【しやにむに】驀地。猛然問。

一天早朝，天亮的時候，城裏邊打出來，驟然間一齊的吶喊起來，賊人說：「這是敵人出來了，一騎也不叫他剩啊！」便蜂擁上去。城兵跑回去，但是還剩下二三十個人。賊們便從四面向這兒攻來。城上把石頭一回擲下來四五十塊，所以又被殺了好幾百人。剩下的全都是稻草人。賊人被騙了個圓滿。

這一回想要猛然間攻下來，賊人們就做了一個大梯子，拿他當

【我先に】爭先。
【今度こそは】這一回是不定要……。此こそ强語勢而用。

堀にわたして橋にした。幅が一丈五尺、長さが二十丈、其の上を賊が我先とに渡った。今度こそは千早城もあやうく見えた。すると正成は、何時の間に用意して置いたのか、たくさんなたいまつを出して、之に火をつけて、橋の上に投げさせた。そうして其の上へ油をふりかけさせた。橋はまん中からもえ切れて、谷そこへどうと落ちた。又賊は何千人か死傷した。

【持て餘す】沒法處置。

賊が千早城一つを持餘してゐると、方々で官軍が賊のひょうろう道をふさいだので賊は人馬ともにつかれた。百騎にげ、二百騎に

渡趟城壕的橋梁，寬一丈五，長二十丈，賊人在這上邊爭先渡過。這一回千早城看着眞危險極了。正成立刻就把不知道他什麼時候預備下的許多火把拿出來，點着了拋投到橋上去，隨着便命令往那上邊撒油。橋從正當中燒斷了，落到谷底裏去。賊又死傷了好幾千人。

賊人沒法處置這千早城，因爲官兵在各方面堵塞賊的糧道，賊人人馬都疲憊了。百騎逃亡，二

げして、はじめ百萬騎といった賊も、しまひには十萬騎に減じ、前後から官軍にうたれて、殘少になって退いた。

前篇千早城戰爭能制鎌倉幕府滅亡之機，官軍起於四方。新田義貞亦舉兵討鎌倉而遂亡之。本篇爲是戰記。

正成は實にえらい人である

八　鎌倉攻

「極樂寺坂の味方があやうございます。」といふ使の後から、

「大將も討死されました。」

といふ使が來たが總大將の新田義貞はびくともしません。手もとの軍ぜい一萬騎を引きつれて、たゞちに極樂寺坂へ向ひました。

【極樂寺坂】鎌倉附近。

百騎逃跑，最初百萬騎的賊到後來減到下十萬騎了，前後受官軍的攻打，殘餘無幾退下去啦。

正成實在是偉大人啊。

八　攻鎌倉

「極樂寺坂的我兵非常危險了。」

說這個的使者之後隨着說：

「大將也陣亡了。」

的使者又來了，但是總帥新田義貞並不恐懼。率領手下的軍隊兩萬騎一直的向極樂寺坂去了。

稲村崎の此方に着いて、賊のそなへを見渡しますと、北の山手には木戸を立てて、數萬の兵が之を守っています。又南の海上にはひしひしと軍船を浮べて、岸には大木がきりたおしてあります。鎌倉へは海陸ともに攻めこむすきがありません。

義貞は馬から下りてかぶとをぬぎ、はるゞと海上を拜しました。さて、心の中に、義貞今天皇の御ためにいくさを起して賊臣北條をほろぼさ

【さて】然後。

到了稻村崎的這方面，一望賊人的防備，北邊的山地立着柵門，數萬的兵士守着牠，還有南邊的海上緊々的浮着兵船，岸上鋸倒了樹木。向鎌倉海陸全都沒有可攻的間隙。

義貞下了馬，摘去頭盔，恭々敬々的禮拜海上。然後心裏念着：義貞現在爲着天皇開了戰爭，打算把賊臣北條掃滅，希望海神把潮退了，將道給開々，拿

うとしています。海神ねがはくは潮を退けて、道を開かせたまへと念じて黄金作の太刀を取って、海の中に投入れました。

【開かせ給へ】請然開開。
【念じて】心裏祈禱說。

すると、これまで潮の滿ちていた稲村崎は、其の夜の月の入る頃に二十餘町にわかに干上って砂地にかわり、落ちて行く潮にさ

出來黃金做的大刀，投到海裡去了。

這麼一來，向來潮很滿的稻村崎，在這天夜裏月沒的時候，二十餘町俄然間干了，變成沙子地，賊人的軍船被落去的潮流所吸引，全都冲往海面去了。

そはれて、賊の軍船はことごとく沖へ流れてしまひました。

義貞は之を見て、「ものども進め。」と、其の遠干がたを眞一文字に鎌倉さして攻めこみました。賊のそなへは忽ちくずれて、防ぐにも防がれず、たゞあわてさわいでいます。

此の時義貞が方々へ火をかけさせますと、濱風が之をあふり立てたからたまりません。鎌倉は一面火の海になって、賊の大將高時以下北條方は此の火の中にほろびてしまひました。

義貞看見了這個，便說着：「兵士們進啊！」簡直的攻進鎌倉去了。賊人的防備忽然間崩潰了，防也不勝防啦，只有周章騷嚷着罷了。

這個時候義貞命令在各方面放火，海風一吹助勢，簡直是了不得了。鎌倉一面成了火的海，賊人的大將高時以下北條那方面的人在這個火裏滅亡了。

【あふり立て】吹助。

九　川中島の戰

一　一騎打

日本戰國時代群雄起於諸方天下亂如麻。就中川中島之一戰最壯烈而亦富於佳話最膾炙人口。

【一騎打】戰國時代之戰常見「一騎打」，即双方各出一選士交鋒以爭勝負。

越後の上杉謙信と甲斐の武田信玄が、たびたび信濃の川中島で戰つた。

ある時謙信が山の手に陣を取っていると、信玄は兵を二手に分けて、はさみうちにしようとした。謙信はそれをさとって、夜の間に進んで信玄の陣へ攻入った。信玄は不意を打たれておどろいたが、忽ち陣立をかへて、敵を引受けた。

兩軍は入りまじって、火花をちらして戰っ

【越後】北陸道新潟縣就是越後。

【火花をちらして】交鋒尖端發散火花，形容交鋒激烈之情。

九　川中島之戰

一　單騎對單騎

越後的上杉謙信和甲斐的武田信玄，兩次三番的在信濃的川中島交戰。

某時謙信在高地方列上陣，信玄就把兵分成兩方，預備夾攻去。謙信知道了這個，便在夜間前進，攻進了信玄的陣營。信玄被攻于不意很驚惶的，但是忽然間改變了陣形，抵對上敵衆。

兩軍混和起來，酣戰着。謙信打馬一鞭子，闖進信玄的本陣，掄

た謙信は馬に一むちくれて、信玄の本陣に切りこみ、大太刀をふりかざして、信玄に打ってかゝった。信玄は刀をぬくひまがない。ぐんぱいうちわでふせいだが、柄が折れて、肩先へ切りつけられた。信玄の家來は之を見て後からやりで謙信をついたがあたらない。力一ぱいに謙信の

開大刀向信玄砍去。信玄沒有拔刀的空兒，用軍配的圓扇子擋上去，但是把折收，肩膀頭被砍上了。信玄的近衛看見了這個，便從後方用槍來扎謙信，可是沒有扎中，用力量打謙信的馬，馬驚悚着跳起來，所以信玄危險的地方得救了。

馬をなぐりつけた。馬はおどろいてとび上ったので、信玄はあぶない所を助かった。

二　中なおり

川中島で前後五回戰ったが、まだ勝負がつかなかった。第六回目にいたって、信玄から謙信へ、

「戰をはじめてから十二年、今に勝負がきまらない。よって明日たがひに勇士を一人づつ出して組討をさせ、勝った方のものが川中島を取ることにしては。」

と申しこんだ。謙信はこれに同意した。

翌日武田方からは安間彥六といふ大の

【組討】打撃戰。
【取ることにしては】下邊省略「どうか」。
【申しこんだ】提議了。

二　講和

在川中島前後戰了五回，還沒有分出勝負。到了第六回，信玄對謙信提議道：

「自從開戰已經十二年了，到現在勝負還沒有決定。因此明天戰鬪的時候，各自派出來一員勇將，叫他們倆摔扭，勝的便佔領川中島怎麼樣？」

謙信對于這個同意了。

第二天，從武田那方面一員叫

男が、物の具見事に着かざり、大の馬に打乘って、上杉方の陣へ向つた。上杉方からは小さな馬に乘った小さな鎧武者が一人あらわれて、

「これは長谷川與五左衛門と申す者、小兵なれどもお相手致す。」

と名のつた。

二人はたがひに馬を乘りよせて、馬上のまま

做安間彥六的大漢子，盛甲很漂亮的裝飾着，跨着大馬，迎向上杉那方面的營陣。從上杉那方面現出來一員騎着小馬披掛甲冑的小將報名道：

「我叫做長谷川與五左衛門雖然個兒小，要同你對付對付。」

兩個人互相把馬往一塊兒湊

【むんずと】 用力的。

までむんずと組み、兩馬の間にどうと落ちた。

彥六が與五左衛門を組みふせた。武田方が之を見て、聲をあげて喜ぶと、與五左衛門は忽ちはねかえして、彥六を組みしき、手早く首を取ってさし上げた。上杉方はどっとときの聲をあげた。

無念に思って武田方から十騎ばかり、木戶を開いて切って出ようとした。此の時信玄は之を止めて、

「鬼神の如き彥六が、あれ程の小兵に討たれたは味方の不運。約束の川中島は謙信

合，就在馬上用力的揪起來，咕咚一聲落在兩馬的當間了。

彥六把與五左衛門按倒了，武田這方面看見了這個，揚聲一歡喜，與五左衛門騰地翻反跳過來，把彥六撅扭着按躺下，很爽利的就腦袋割下舉起來了，上杉這方面哄然舉起來凱聲。

很覺得可恨，有十來名騎兵從武田這方面，打開木寨想要闖出去。這個時候信玄止住他們道：

「像鬼神一般的彥六，被那樣的小矮個子殺了，是我們這方面的運氣不好啊。約定下的川中

に渡す。」

といったので、めでたく中なおりが出來た。

十　木下藤吉郎

豐臣秀吉自西夫人，擁織田信長之後，平定天下，爲太閤輩自，位極人臣。頗富逸話，最受國民敬愛。

豐臣秀吉がまだ木下藤吉郎といって、織田信長の草履取をしていた時のことである。

【よく……する】常愛……例「あの子供はよくいたずらをする」那個孩子常愛開淘氣。

信長はよく夜明前から馬場へ出て馬を乘りならした。毎朝げんかんへ出て、

「誰か居るか。」

と呼ぶと、いつも藤吉郎が眞先に出て來た。

【いつも】平常。

或大雪の朝、信長はいつもより早く起きて、

「誰か居るか。」

島給謙信罷。」

很可愛的講和了。

十　木下藤吉郎

是豐臣秀吉還叫木下藤吉郎，做織田信長的提鞋隨從的時候的事情。信長常從天亮以前就到跑馬場去遛馬去，每天早晨到房門口一招喚：

「誰在着呢？」

什麼時候都是藤吉郎最先出來。

某一天大雪的早晨，信長比那一天起來的都早，一招呼：

「誰在着呢？」

と呼ぶと、やはり藤吉郎が出て來た。

「そち一人か。」

【そち】汝。昔時之呼稱。

「はい。」

「いつもより早いのに、よく參って居った。」

【參って居った】參って是「來て」或「行って」的敬語。

「いつも人より一時前に參って居ります。」

「一時も前に。」

といって信長は驚いた。一時は今の二時間にあたるのである。

「寒からうが。」

「少しも寒くはございません。」

「寒くはない。」

「はい。これが御奉公だと思ひますれば、少

還是藤吉郎出來了。

「你一個人麼？」

「是的。」

「我比那天起來的都早，你來的眞早啊！」

「那天我都比別人早來一個時辰啊。」

「一個時辰以前麼？」

信長這麼說着吃了一驚。一個時辰合現在兩點鐘。

「冷罷！」

「一點兒也不冷。」

「不冷。」

「是的，若一念及盡忠主人

しも寒くはございません」

信長はかるくうなずいたが、其の後間もなく藤吉郎を草履取から引上げて役人の數に入れた。これがそも〳〵藤吉郎出世のいとくちである。

【そも〳〵】起根兒。原來。例「そも〳〵から言へば、若起根兒上說是道理著。」【いとくち】端緒。根源。

十一　加藤清正

豐臣秀吉命令向朝鮮去的前鋒大將是加藤清正・小西行長兩個人。行長嫉妬清正的軍功，託石田三成當着秀吉中傷清正的行爲。

便一點也不冷了。」

信長微々的點了點頭，以後不久就把藤吉郎從提鞋隨從提陞到官人的伍中。原來這就是藤吉郎的出息的源頭。

十一　加藤清正

豐臣秀吉が朝鮮へ向はせた先手の大將は加藤清正・小西行長の兩人でした。行長は清正の軍功をねたみ石田三成に賴んで、清正のことを秀吉にざんげんしました。

三成は秀吉のお氣に入りですから、秀吉は

【お氣に入り】寵臣。

加藤清正爲豐臣秀吉之重臣。

之を信じて、清正に歸國を命じました。清正は朝鮮を立って、伏見へ參りました。當時秀吉は伏見の城に居ったのでございます。

清正は先づ增田長盛をたずねました。此の人だけは自分のために心配してくれるであらうと思ったのでございます。ところが長盛がろく〳〵あいさつもせず、石田と中直りをしなければ、太閤の御きげんは直るまいと申しました。清正は腹を立て、

「神々も照覽あれ、戰一つ出來ず、人のかげごとばかりいふ石田めとは、此の清正一生中直りは致さぬ。たとひ數年の軍功

【ろく〳〵……もせず】並不怎樣……。例「ろく〳〵話もしないで分れた」「人他不怎樣說的就分別了。」【あいさつ】行禮。說客氣話。

【石田め】石田奴。石田那個東西。

秀吉就信了這個，命令清正回國。清正便由朝鮮動身往伏見去了。因爲當時秀吉在伏見城住着呢。

清正先訪問了增田長盛。因爲他以爲只有這個人能爲自己分憂罷。然而長盛並不怎樣客氣，說是若不同石田講和，太閤的怒氣是不能平息的。清正生氣啦。

「皇天在上垂照着，這個清正一輩子也不能和那一回不出去打仗，只說人家的壞話的石田和好的。就假令不承認我這

がみとめられず、此のまゝ切腹を命ぜられても、石田めとは中直りは致さぬ。」

といひきつて歸りました正直者の清正は人づきあひが下手なので、誰一人清正を秀吉にとりなす者がなく、とう〳〵太閤のお目通へ出ることを禁ぜられました。

ところが或夜大地震が起つて、人家堂塔一時に倒れ人々の泣叫ぶ聲は天地にひゞきました。此の時清正は、地震と共にはね起き家來の者二百人に梃を持たせて、一さんに伏見の城へかけつけました。夜はまだ深うございます。

【いひきつて】斷言。
【人づきあひ】交際。
【とりなす】在……的面前照應。
【目通へ出る】上面前去。
【はね起き】跳起來。
【一さんに】一直的。

幾年的軍功，這麼樣命令我割肚子，也不能和石田和好啊！」

這麼樣決言回去了。因爲誠實的清正交際上很拙劣，沒有一個人在秀吉的面前照應清正的，結果連會見太閤都被禁止了。

可是某個夜裡起了大地震，房子・廟宇・塔一時都倒了，人們的哭喊的聲音振動天地，這個時候清正和地震一同跳起來，命令部下二百人拿着棒子一直的跑到了伏見城。夜還很深呢。

秀吉は城の庭にしき物をのべさせ、幕やびようぶでまわりをかこはせ、大提灯をとぼして御臺所やおそばの女どもと居りました。其所へ清正がかけつけました。まだ誰一人城に登つて居りません。清正は大聲で申しました。

「加藤清正これまで參上仕る。上樣をはじめ皆樣、おしの下に

【御臺所】太太。昔稱高貴者之夫人曰御臺所。
【參上仕る】來ました的客套話。
【おしの下】重壓之下。

秀吉命令在城的院子裏鋪上地氈，用幕和屏風把周圍圍上，點着大提燈和夫人侍女們在一起待着呢。清正跑到了這兒，一個人也還沒有來呢。清正大聲說道：

「加藤清正來了，我以爲從主上起大家都被壓上了呢，命

【存じ】思ひ的敬話。

【さて〳〵】嗳呀！
【參つた】來了的敬語。

なっては居られぬかと存じ、家來ども二百人に梃を持たせてかけつけました。」

秀吉が之を聞いて、

「さて〳〵、早く參った。」

令部下二百人拿着棍子跑來了。」

秀吉聽到這話，

「哈々，來的很早啊。」

心裏很喜歡，這麼的一看清正的複臉和被日頭晒了的顏色，怒氣消了，眼睛裡含着淚兒，清正說道：

「お庭先の御門を守る者がございません

「沒有把守院子前邊的門的。

と心の中で喜びました。そうして清正のやせた姿日にやけた顏を見ては、怒がとけて涙ぐみました。

【某】昔時武士之自稱。

某の手で固めませう。」

由我來把守罷。」

と清正がいひますと、秀吉はうなずきました。

秀吉點々頭。

間もなく石田三成が城に登て參りました。

不一會兒石田三成來了。

「石田でござる。お通しなされ。」

「是石田啊，放過去罷。」

【石田でござる】石田である的敬話。

「石田といふ者だそうだ。」

「說是叫石田的。」

「ずいぶんおそく來たものだ。」

【ずいぶんおそく來たものだ】怎麼會來的這麼太晚呢？例一君は今日はずいぶん早く起きたものだ！你今天怎麼會起的這麼早呢？」

「怎麼能够來的這麼晚呢？」

「通さないことにしよう。」

【通さないことにしよう】定規不叫他過去罷。

「不叫他過去罷。」

なごと清正の家來どもが申します。三成は驚いて、

清正的部下們這麼樣的說了。三成吃了一驚。

「今天下に此の石田を知らぬ者はあるまい、御門を守る者は誰か。」

「現在天下不知道這個石田的恐怕沒有罷。守門的是誰呢？」

「加藤清正の家來でございます。」

「何と申す。清正は上樣へお目通がかなはぬはず。」

【何と申す】何といふ。申す是いふ的敬語。
【お目通りかなはぬ】不准謁見。
【かなはぬはず】此はず應該的意思。

「何故にお目通がかなひませぬ。」

「爲什麼不准見呢？」

秀吉が之を聞いて、幕の中から、

秀吉聽着了這個，從幕裡說道：

「もうよい。通してやれ。」

「已經好了，讓他進來罷。」

こいひましたので、清正は

清正說：

「あのせいの低いのが石田だ。通してやれ。」

「那個矮子是石田啊。放他進來罷。」

といって、三成を入れてやりました。

把三成放進來了。

翌日諸大名が伏見城の大廣間へつめました。秀吉は清正を召出して、

【大廣間へつめました】排在大廣。

第二天諸侯們排在伏見城的大廳裏，秀吉把清正招呼出來，論問他道：

「其の方は無分別者で、大名になってもま

【其の方】主君對臣下之呼稱。

「是加藤清正的部下。」

「何と申す？應該不准清正謁見主上啊。」

「說什麼？」

だ仲間けんかのくせがぬけぬ。小西程の者を堺の町人とのゝしり、又明國への返書に豐臣清正と記したといふが、それはまことの事か。」

【堺】在大阪南方的一都市。

とたずねました。清正はつゝしんで、

「明國の使者、某の陣中に參り、『大明の軍勢四十萬、勢はげしくおしよせたるに、日本の大將小西行長は一たまりもなくにげ落ち、もはや朝鮮に日本の武士は一人も居らぬ。生けどった者は皆かへせ。命ばかりは助けてやらう。』などとの廣言。御威光にもかゝはる所と存じ、『小西は日

【一たまりもなく】一點也沒能抵抗，禁不住，例「あの城は敵に攻められるとひとたまりもない」那個城池禁不住敵人的攻。

做了諸侯，還沒有除掉和同輩們打架的脾氣呢。侮辱小西那樣人說是堺市的做買賣人，又在給明朝的答書裡記上豐臣清正，這都是眞事麼？」

清正恭謹着，拿清々楚々的舌辯陳說道：

「明朝的使者來到我的營裡大言說：「大明的軍勢四十萬，勢力很盛的擁來，日本的大將小西行長一點也沒能抵抗就逃了，朝鮮裡日本的武士已經一個也沒有了。生擒的全都還給我罷。那麼就你們的性命可以饒的。」我想這對於主上的威光很有防礙，我便做回書

本の大將ならずまことは堺の町人、道案内の者故、にげも致したであらう。此の清正こそはまことの大將、四十萬の軍勢は此所へ向けよ、切って〳〵切りまくり、其の勢で明の都へおしよせ、四百餘州をやきはらはう。」と返書をつかはしましたが、某は四つ五つの頃から親にはなれて、姓も存じませんので、御威光を借りて豐臣と記したのでございます。」

とべんぜつさわやかに申し開きました。秀吉は感心して、

「それは皆此の方がやりそうな事。清正は

【此の清正こそは】這清正就是。こそは强詞奪用。

【申し開きました】說開了。

【此の方】我。

道：「小西不是日本的大將，實在是堺的買賣人，因爲是領道的所以總跑了罷。這個清正總眞是大將呢，四十萬的軍勢向這裡來罷，殺々砍々，乘這個勢兒侵入明都，把四百多州全給燒燬。」我在四五歲的時候便和父母分離了，因爲不知道姓，總借主上的威光寫上豐臣的。」

秀吉很佩服的，說道：

「若是我辦呢，想必一定這

つけひもの頃から、此の方のひざの上でそだったので、何時か見習ったものと見える、もと此の方には近い親類の者、豐臣と名のったのも差支がない。」

といって軍功の賞として、清正に名刀をあたへました。

十二　吳鳳

臺灣の蕃人にはお祭に人の首を取って供へる風がありますが、阿里山の蕃人にだけは此の惡い風が早くから止みました。これは吳鳳といふ人のおかげだと申します。

【此の方がやりさうな事】若是我辦呢，想必一定這麼辦。

【つけひもの頃】幼少之時。日人穿衣時上繫帶子，但是幼少之時把帶子縫定衣裳上。這叫做つけひも。

【見習つた】學會。

【……ものと見える】想必。

麼樣辦啊，清正從很小的時候就在我的膝上養育着，想必不知道什麼時候學會的。本來是我的近親，用豐臣做名也沒有防礙的。

給清正賞刀做軍賞。

十二　吳鳳

台灣的蕃人在祭典的時候，有取人頭上供的風習，但是只有阿里山的蕃人，這種惡習從很早就取消了。聽說這是叫吳鳳那個人的功勞。

吳鳳は今から二百年程前の人で、阿里山の役人でしたたいそう蕃人をかわいがりましたので、蕃人からは親のようにしたはれました。

吳鳳は役人になった時から、どうかして首取の惡風を止めさせたいものだと思ひました。ちょうど蕃人が、其の前の年に取った首が四十餘ありましたので、それをしまって置かせて、其の後のお祭には、毎年其の首を一つづつ供へさせました。

四十餘年はいつの間にか過ぎて、もう供へる首がなくなりました。そこで蕃人どもが

【吳鳳のおかげだ】多虧吳鳳。

【ものだ】是感嘆之詞，沒道理的也意思可以明白。

吳鳳是距現在二百多年前的人，是阿里山的官吏。非常的愛憐蕃人，所以被蕃人親慕的像父母一般。吳鳳從做了官的時候起，就想怎麼樣能把取頭的惡習給取消了。正趕上蕃人在這前一年取了四十多顆首級，所以他命令把這個停止了，以後在祭典上，每年叫他們從這些首級裡拿一顆上供。

四十餘年在不知不覺之間過去了，上供的首級已經沒有啦。

吳鳳へ、首を取ることを許してくれといって出ました。吳鳳はお祭の爲に人を殺すのはよくないといふことを說聞かせて、もう一年、もう一年とのばさせていましたが、四年目になると、

「もう、どうしても待っていられません。」

といって來ました。吳鳳は

「それ程首がほしいなら明日の晝頃、赤い帽子をかぶって、赤い着物を着て、此所を通る者の首を取れ。」

といひました。

翌日蕃人どもが、役所の近くに集っていま

蕃人們去要求吳鳳允許他們割取人頭，吳鳳給他們解釋，爲祭祀而殺人不是一件好事情，又一年又一年的延長下去，到了第四個年頭，蕃人們來說道：

「無論怎麼樣也不能再等待了。」

吳鳳說：

「若是這樣希望人頭的話，明天晌午就把戴着紅帽子穿着紅衣服的從這兒過的人砍罷。」

第二天蕃人們集聚在衙門的前

すと、果して赤い帽子をかぶって赤い着物を着た人が來ました。待ちかまへていた蕃人どもはすぐに其の人を殺して、首を取りました。見ると、それは吳鳳の首でございました。蕃人どもは聲を上げて泣きました。

【待ちかまへてゐた】意等前的。等得不耐煩的。

さて蕃人どもは、吳鳳を神にまつって、其の前で、此の後は決して人の首を取らぬとちかひました。

邊，果然戴紅帽子穿紅衣服的人來了。等得不耐煩的蕃人們，立刻就把這個人殺了，砍下首級。一看，這是吳鳳的腦袋。蕃人們放聲哭起來了。

蕃人們拿吳鳳當神仙祭祀，在他的面邊立誓以後決不砍人家的頭了。據說現在還是那個樣子呢。

そうして今も其の通りにしているのだといひます。

十三　乃木大將の幼年時代

乃木大將は幼少の時體が弱く、其の上臆病であった。幼名を無人といったが、寒いといっては泣き、暑いといっては泣き、朝晩よく泣いたので、近所の人は大將のことを、無人ではない泣人だといったといふことである。

大將の父は長府藩主に仕へて、江戸で若君のお守役をしていたが、自分の子がかう

乃木大將名希典（讀れすけ），當日俄交戰之時爲第三軍司令長官，遂陷旅順攻不落之難。大將人格高潔住儉樸。大將夫妻俱痛明治大帝而終世。國民崇敬稱軍神，建乃木神社永慕其德。

【寒いと、いっては】此は表示習慣。

【よく泣いた】常愛哭。

【……といったといふことである】聽說……。

【長府】又稱長州，是山口縣在本州西端。

【江戸】東京的舊名。

【藩主】德川封建時代地方各藩之領主。

十三　乃木大將的幼年時代

乃木大將小時候，體格脆弱，而且膽小。小名叫做無人，因爲冷也哭，熱也哭，早晚非常的好哭，據說附近的人都說大將不是無人，是哭人。

大將的父親在長府藩主那兒做事，在江戸當幼君的侍衛，自己的兒子是這麼樣的脆弱的，好哭

【泣虫】好哭的人。例「あの子供は泣虫だ」那個孩子是好哭的。

【うす暗い】 溥黑。

【四十七士】赤穗藩臣四十七士守義爲主君報仇。

【思はず】 不自覺的。不料。

【よし】 表示決心之語。

弱虫の泣虫では、第一藩主に對しても申しわけがない、どうかして大將の體を丈夫にし、氣を強くしなければならぬと思った。

そこで大將が四五歲の時から、大將の父はうす暗い中に大將を起して、往復一里餘もある高輪の泉岳寺へよく連れて行った。泉岳寺には名高い四十七士の墓がある。大將の父は途々義士のことを大將に話してきかせて、其の墓に參詣したのである。

或年の冬、大將が思はず「寒い。」といった。すると大將の父は

「よし、寒いなら、暖くなるようにしてやる。」

といって、大將を井戸端へ連れて行って、着物をぬがせて、頭から冷水を浴びせかけた。大將はこれから後、一生の間「寒い。」とも「暑い。」ともいはなかったといふ。

大將の母もまたえらい人であつた。大將が何か食物の中にきらひな物がある

這麼着，從大將四五歲的時候，大將的父親在天剛亮的時候，就把大將叫起來，帶他往來回也有一里多地的高輪的泉岳寺去，泉岳寺是聲名很高的四十七士的墳墓。大將的父親在道上把義士的故事說給大將聽，參拜那座墳墓。

某一年的冬天，大將不自覺的說道：「冷啊、」。大將的父親立刻就說道：

「好吧！若是冷，我叫你暖和暖和。」

把大將拿到井沿上，叫他脫去衣裳，把冷水從頭頂澆下去，據說大將從此以後，一輩子也不說「冷」和「熱」了。

大將的母親也是位偉人，若看出大將在食物裏有不喜歡的東西，吃三頓一定只把他不喜歡的東西拿出來三頓，一直到大將吃

と見れば、三度三度の食事に、必ず其のきらひな物ばかり出して、大將が馴れるまでうち中の者がそればかり食べるようにした。其の爲、大將には全く食物に好ききらひといふのがないようになった。

大將が十歲の年、大將の一家は鄕里へ歸ることになった。其の時大將は江戸から大阪まで、馬やかごに乘らず、兩親と共に步いて行った。當時大將の體は、もうこれだけ丈夫になっていたのである。實に鐵は熱い

慣了，家裏的人也都只吃那個。因爲這樣，大將在食物裏沒有喜好不喜好的東西了。

大將十歲那年，大將的全家回故鄕去了。那個時候，大將從江戸到大阪，也不騎馬坐轎，和雙親一塊兒走着。可見當時大將的身體已經這麼樣的結實了。實在鐵是不可不趁熱鍛鍊的。

うちにきたへなければならぬ。

鄕里の家は六疊・三疊の二間と、二坪の土間とがあるだけの、至ってせまい、そまつな家であった。けれども刀・槍・長刀など、武士の魂と呼ばれる物は、何時もきら〳〵光っていたといふことである。

此の父母の下に、此の家に育った乃木大將が、終生忠誠質素でおし通して、武人の手本と仰がれるようになったのは、まことにいわれのあることである

【疊・坪】六尺方呼做一坪。一坪裏能鋪二疊席。

【至ってせまい】至極狹小。

【おし通して】終始一貫。

故鄕的房子只有六疊・三疊兩間和兩坪寬的土倉子；是非常窄小而且簡陋的房子。但是據說刀・槍・長刀等叫做武士之魂的東西，無論什麼時候都閃々的放光。

在這樣的父母之下，這個家裏養育出來的乃木大將，一輩子拿忠誠質素渡過，所以被景仰爲武人的模範，實在也有其來原的喇。

十四

十四　弟橘媛

景行天皇の皇子日本武尊、蝦夷を平げよとの勅命を奉じて、東國の方に下り給ひき。駿河の賊を亡し給ひし後、相模の國より上總の國へこえんとて、今の浦賀のあたりより海を渡り給へり。

既に大海に出で給ひしに、大風俄に吹來りて、波すさまじく荒れくるひ、御船少しも進まず、今にもくつがへらんばかりなりき。其の時、御供にしたがひ給へる弟橘媛、尊の御身危しと見給ひ、

「これ海神のたゝりならん。われ皇子の御身代となりて海に入り、神の御心をなだむべし。皇子は勅命を果して、めでたく都に歸り給へ。」

といひて、菅筵八枚・敷皮八枚・きぬの敷物八枚を波の上に敷重ね、其の上に飛下り給へり。

ふしぎや今まで荒れに荒れたる大海、おのずから靜まりて、おだやかなる海となり、尊はつゝがなく上總の國に着き給ひきといふ

景行天皇的皇子日本武尊，奉了剿平蝦夷的命令，往東國那方面去啦。滅了駿河的賊人之後，從相模國往上總國去，就從眼前的浦賀那兒渡海。

已經進了大海，大風猛然間吹來，浪很利害的激動，船分毫也不能前進了，現在就要翻轉的樣子，這個時候做武尊的侍兒的弟橘媛，發見武尊的身體很危險，說道：

「這大概是海神做的祟罷。我代替皇子的玉體進海裏去，安撫海神的心。皇子完成敕命。很光榮的回都城去罷。」

把菅席八張・皮獅子八張・綢獅子八張，疊在海浪的上邊，她就跳到那上邊去。

很奇怪的，從前風波很大的大海，自然而然的靜下去，波也靜了風也平啦。據說武尊很平安的到了上總國。

【遣一篇是文言文。【景行天皇】第十二代天皇。【日本武尊】出於本書。

【相模の國】在東京之西神奈川縣。

【上總の國】在千葉縣，隔海與東京相對。【浦賀】也在神奈川縣，以造船所有名。

【今にも】快要……。例，あの人は今に歸りますー他快要回來了。【くつがへらんばかり】差一點兒翻轉的程度。

【風】日本字。海上無風叫風。

【……といふ】聽說……。

十五

十五　兩將軍の握手

這篇是歐洲大戰中之一插話。【リエージュ】在比利時國。

リエージュの要塞に立てこもりたるベルギーの勇將レマンは、部下の將卒をはげまし〳〵、エンミッヒ將軍のひきゐたるドイツの大軍を物ともせず、勇ましく防ぎ戰ひたり。されど比類なき四十二センチメートルの大口徑砲の威力に對しては、正義の念と愛國の情とに死を恐れざるベルギー軍の防戰も、終に如何ともしがたく、要塞は全く破壞せられ、將卒は多く戰死せり。

【如何ともしがたく】無可奈何。

レマン將軍も、火藥の爆發によりて起れる

十五　兩將軍之握手

鎭守里耶袁要塞之比利時勇將列曼，鼓勵部下將士，不介意於延米希將軍所率領之德意志大軍，而採取勇敢之守禦戰。然對於毫無比類之四十二生的米突大口徑砲之威力，當正義之念與愛國之情死而不懼之比利時軍的防戰，終於無用，要塞完全被毀，將士多數陣亡。

列曼將軍亦因火藥爆發時所起

ガスの爲に窒息し居たるをドイツ兵に發見せられて、野戰病院に送られたり。

後日レマン將軍が捕虜としてエンミッヒ將軍の前に引出されし時、エンミッヒ將軍はみずから進んで握手を求め、

「閣下の防戰はまことに見事であった。」

と感歎せるに、レマン將軍は靜かに、

「おほめにあずかって恐れ入る。しかし部

之瓦斯而氣窒，爲德意志發見送之於野戰病院。

後數日，列曼將軍身爲捕虜而被引於延米希將軍之前時，延米希將軍自前而求握手，歎曰：

「君子防禦戰實甚可觀。」

列曼將軍靜答曰：

「蒙過奬實在抱歉之至，但

【おほめにあずかって】蒙過奬揚歉之至。

下の者は最後までベルギーの名譽をけがさなかつたつもりである。」

と答へたり。やがてレマン將軍は、萬感胸にみちて、かすかにふるふ手に帶劍をときて渡さんとするを、エンミッヒ將軍は

「いや、それには及ばん。閣下の劍は軍人の魂として少しも名譽をきずつけなかつた。」

と强いて之をおし止めたり。

レマン將軍の目には涙ありき。

部衆已決定雖至最後亦無悔此利時之名譽。」

列曼將軍立即萬感塡胸，以徹顫之手解除佩刀，欲交付之，延米希將軍强阻之曰：

「無須，不必若斯。君之刀人之魂也，毫未損傷其名譽。」

列曼將軍之目中充有淚水。

【それには及ばん】不必那樣辦。

十六　水師營の會見

旅順開城約成りて、

旅順開城已陷，彼我兩將會見於水師營而約開城。

十六　水師營的會見

旅順開城約已定，

敵の將軍ステッセル乃木大將と會見の、所はいずこ水師營。」

庭に一本なつめの木、彈丸あともいちじるく、くずれ殘れる民屋に、いまぞ相見る二將軍」

乃木大將はおごそかに、御めぐみ深き大君の大みことのりつたふれば、彼かしこみて謝しまつる。」

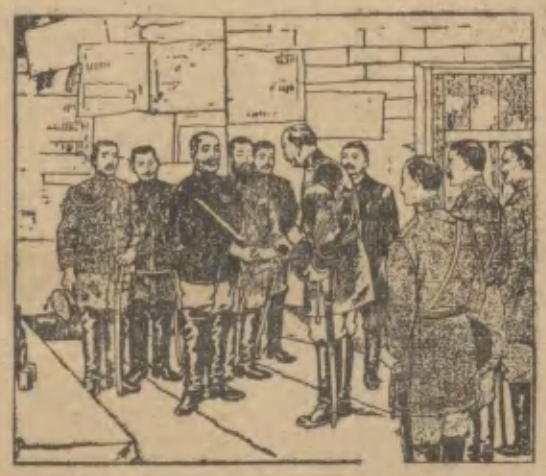
昨日の敵は今日の友、

敵之將軍斯鐵舍爾，和乃木大將相會見，是何處？是水師營。」院中一顆棗兒樹，彈丸痕跡仍顯著，業已頹殘民宅中，現在啊！相見的兩將軍。」乃木大將嚴肅中，傳遠仁慈深懇彼君之諭命，敵將惶恐深致謝。」昨日之敵今日友，

【いずこ】何處。

【いまぞ】此ぞ、宇强語勢用。

語る言葉もうちとけて、
我はたゝへつ、彼の防備



彼はたゝへつ、我が武勇。」
かたち正していひ出でぬ、

叙語亦投緣，
我所稱讚彼之防禦。

彼所稱讚我之勇武。」
正容說道：

『此の方面の戰鬪に
二子をうしなひ給ひつる
閣下の心如何にぞ。』と。」
『二人の我が子それ〴〵に、
死所を得たるを喜べり。
これぞ武門の面目』と、
大將答力あり。」
兩將晝食共にして、
なほもつきせぬ物語
『我に愛する良馬あり。
今日の記念に獻ずべし。』」
『厚意謝するに餘りあり。

【二子をうしなひ】乃木大將之二子從交於旅順戰役。

【なほも】此も無意。惟以語調而已。
【つきせぬ】つゝないゝ。
【行くや右左】此や字無意。惟以整語調而已。

「這一番的戰鬪上，
喪失二兒，」
君心果若何？
大將回答有力量：」
「對於吾二兒，
喜其得死所。
此爲將門之面目。」
兩將共午餐，
尙有不盡談，
「有我極愛之良馬，
記念今日獻與君。」
「君之厚意深感謝，

軍のおきてにしたがひて、
他日我が手に受領せば、
長くいたわり養はん。」
『さらば』と握手ねんごろに、
別れて行くや右左
砲音たえし砲臺に
ひらめき立てり日の御旗」

仍須順從軍之紀。
他日若果歸與予，
當爲常々保養之。」
「再見再見。」握手慇懃，
別去分左右。
砲音已絕砲臺上，
閃耀立着的太陽旗。」

詳註對譯

日語歷史讀本　終

中日對譯

東京速修日本語讀本

前清欽賜雙龍三等第一等星
河南省高等師範學校教授
奉天南滿中學堂堂長
飯河道雄先生編譯

裝訂堅牢
價格低廉

分册　定價國幣　上卷三角　下卷五角　郵費各四分
合本　定價國幣八角　郵費六分

風行全滿有數十萬讀者
已出一百餘版屢加訂正革新

本書爲飯河道雄先生多年心血結晶的偉作。出版以來、深得社會之推奬、繁至通都大邑、郵至山村海島、到處都可以看到。雖屢加增印、而尤供不應求、這是敝會深引以爲欣仄的。

中日對譯　速修日本語讀本詳解　定價國幣三角　郵費壹二分

……內容概略……

（第一編）（片假名、單語）五十音、濁音、拗音長音等日語音韻全殼之說明、凡十三課。（第二編）（單句、單文）普通用話須知之基本言語、凡二十六課。（第三編）（平假名）凡五課第四編）（會話）早起的應酬、晚上的應酬、慶賀、弔慰等日常須知會話之基礎凡三十一課。（第五編）（文話）以白話體文話體解說日本之風俗習慣而蒐集語種書簡文應用文件各種之材料凡三十二課。（練習問題）每課附以練習問題數道。

（對譯）本會同人中日滿三國先生協力翻譯、務期無謬之處、語調流暢、無直譯不佳之感。

書名	定價 圓	定價 角分	郵費 角分
對譯 增補 日語會話寶典	一	八〇	六
對譯 詳註 日滿交際禮法與會話	一	四〇	四
對譯 詳註 初等日本語讀本合本	一	五〇	八
同 分冊 一二 三四	各	三五 四五	四
詳註 中等日本語讀本 一二 三四	各	四〇	四
對譯 速修日本語讀本	一	八〇	六
同 詳解	一	三〇	四
京音旁註 速修日語會話	一	四〇	四
對譯 大衆日語會話	一	三〇	四
對譯 日本語法易解	一	四〇	一二
對譯 簡明日本語法讀本	一	五〇	四
訂正 增補 新體日語讀本（入門篇）	一	三〇	四
同（口語體篇）	一	五〇	六
文教部審定 初級小學校 日本語教科書 上冊 下冊	各	〇八	二

書名	定價 圓	定價 角分	郵費 角分
高級小學日語讀本（入門篇）	一	一〇	二
同（會話體篇）	一	一五	二
袖珍日語辭典	一	五〇	四
五十音順索引 日華大辭典	三	八〇	二〇
康德民衆書信	一	一五	二
對譯 詳註 日本普通尺牘	一	七〇	六
詳註 日語歷史讀本	一	二五	四
對譯 詳註 日語地理讀本	一	二五	四
對譯 日語新聞文讀本	一	五〇	六
世界著名小說選	一	四〇	八
現代中國小說選	一	四〇	八
月刊 日語研究	一	一五	〇
月刊 標準日語講義錄	一	五〇	六
月刊 鳳凰	一	一二	〇

中日對譯 日語會話寶典

前、滿鐵教育研究所主事
旅順第二中學校校長
飯河道雄先生編譯

定價國幣八角
郵費六分

破天荒之快著
中日間之關鍵

增補 卷首新添第一篇發音篇二十五頁、第二篇會話基礎篇五十餘頁以供初學之便

本書是專供中滿二國人士、便於自己學習日本語會話而編纂的。△本書的第一特色 著者不惜餘力、多方羅集中日兩國人之間日常所最常使用的辭句做會話材料。但至於交際上的會話、則著者已另有別册—「中日對譯交際會話」、所以本書不特備載。△第二特色 凡於每課終了之後、又以「類語」之名、添註於其題目有關聯的多數要言、這是在其他書籍中鮮見之列、並可以說是本書首創的試作。△第三特色 本書的譯語全用北平話。這是因爲本書一方面又可以給日本人作中國話研究使用的緣故。△第四特色 注意單語篇的分類法、且蒐集很多日常所最常用的辭句語言。讀者諸君若關於本書質問疑義、著者必樂爲答覆。

昭和十一年七月二十五日初版印刷
昭和十一年八月一日初版發行

對譯 日語歷史讀本
詳註

改正定價 國幣四角

奉天商埠地十一緯路第一一九號
編纂者兼發行者 飯河道雄
兼印刷者

奉天商埠地十一緯路第一一九號
東方文化會

奉天商埠地十一緯路第一一九號
東方印書館

專售東方文化會出版圖書 東方印書館

振替 奉天七〇六番
電話 (日)六五三〇番 (滿)二一三二番

奉天商埠地十一緯路第一一九號
東方印書館編譯所

奉天商埠地十一緯路第一一九號
東方印書館印刷所

東方印書館印刷所印行

翻印必究

發售處

日本語教育振興會藏書之印

46